

# コミュニケーションに主眼をおいた「情報モラル」育成の取り組み

## 「自分も相手も大切にしたい自己表現」を生かした情報伝達

麻布大学附属瀧野辺高等学校 出井 智子・川原 圭太郎

要旨 本校の情報 A で実施しているアサーション技法を用いた情報モラル育成プログラムについての紹介・実践報告を行う。プログラム終了時においての生徒の自由記述から、人間関係形成のきっかけによる喚起と情報通信機器を利活用する際の「情報モラル」の育成をすることができた。また、新しく“一般道徳・倫理観”も育成できた。

### 1. はじめに

#### 1.1 本校について

神奈川県相模原市の中央に位置する麻布大学附属瀧野辺高等学校（以下、本校）では、一般コース（理系クラス/文系クラス）、体育系コースに在籍する生徒が勉学・運動・文化などの分野で多数の実績を残してきた。コミュニケーション教育は、本校において重要な役割を担っている。

#### 1.2 背景

本校では、麻布獣医学園が管理する緊急連絡・安否確認のシステムに登録するために、在校生のほとんどが入学時から携帯電話またはスマートフォンを所有している。生徒が普段から携帯電話・スマートフォンを正しく利用することができる「情報モラル」の教育が不可欠である。また、近年において、人間関係の希薄化、社会性の欠如による問題を補うために、教育現場では、人間関係を円滑にし、社会力を高める様々な手立てを行っている。

本校の情報科では、人間関係の構築と社会性の育成を目指した教育を取り組んできた。従来の携帯電話では、通話・電子メールなどのコミュニケーションが主であった。しかし、スマートフォンが普及し、携帯電話も多機能化・高性能化している昨今、インターネットのサイトを利用した SNS・電子掲示板でのコミュニケーション、なりすましなど様々な課題が生まれ、これらに包括的かつ効果的に対応できる新たな教育プログラムが必要となってきた。

そこで、筆者らは対面のコミュニケーションによる人間関係形成・維持に着目し、情報通信機器を利用したコミュニケーションを理解するためのアサーション技法を含む情報モラル育成プログラム（以下、AT プログラム）を開発した。アサーションとは「自分も相手も大切にしたい自己表現」(平木,2008)である。菅沼・ジャレット(2009)は、情報社会におけるアサーション技法の有効性を述べている。

筆者らは、AT プログラムの基本設計を維持しながら、毎年実施した後の生徒の反応・自由記述による感想などを反映することで継続的な改良を行ってき

た。本年度で 5 年目となるが、インターネットに関する生徒指導上の問題は減りつつあり、対面によるクラスの人間関係にも良い影響が現れている。

#### 1.3 本研究の目的

全ての AT プログラムを行った後、生徒たちが、どのようなことを学び・考えたのかという振り返りに着目する。具体的には、まとめによる自己評定・自由記述を分析する。

### 2. 実施方法

#### 2.1 対象者と実施時期

実施対象者は本学の体育系コースを除く 1 学年 141 名（男子 65 名、女子 76 名）とした。実施時期（全 8 回）は 2012 年 4 月 13 日～5 月 17 日である。その後、まとめを 2012 年 5 月 15 日～31 日に行っている。

#### 2.2 実施プログラム

実施した AT プログラムを表 1 に示す。

表 1 実施した AT プログラム

	情報科	ICT	AT
1	情報社会①(情報社会の特徴)		アサーションを学ぶ・ロールプレイ
2	情報社会②(情報の信ぴょう性と公開)	模擬 Email	人の話を聴く
3	情報社会のなかの個人①(個人情報の保護)	模擬 プロフ	自己を理解する
4	情報社会のなかの個人②(個人の責任)		間違っただ思い込みで気づく
5	情報の伝達①(コミュニケーションの手段)		自分を主張してみる(DE SC法)
6	情報の伝達②(受信者を意識した情報発信)	模擬 BBS	自分を主張してみる(DE SC法②)・怒り
7	情報の伝達②(受信者を意識した情報発信②)	模擬 BBS②	自分を主張してみる(DE SC③)
8	情報の伝達③(電子メールの送受信)	Email	アサーション権・友だちにほめ言葉を送ろう

#### 2.3 振り返りシート

AT プログラム毎に、ルーブリックによる自己評定・自由記述について記入を求め、また、全体のまとめとして自己評定・自由記述による記入を求めた。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 自己評定による分析

質問項目について、生徒に対し、5 件法による自己評定を求めている。

表2 自己評価による単純集計

項目	1.楽しかったか	2.やってみたいと思うか	3.活用していけると思うか
とてもそう思う	85	86	65
そう思う	74	67	80
わからない	1	8	17
そう思わない	2	1	0
まったく思わない	0	0	0
Total	162	162	162

表2から、「1. (今までの授業を通して) 楽しかったか」、「2. (またこういう授業があったら) やってみたいと思うか」という質問に対して、95%以上の生徒が肯定的であることがわかった。一方で、「3. (今後の生活で) 活用していけると思うか」という質問に対しては10%の生徒が「わからない」と考えていることもわかった。

それぞれの質問項目について着目すると、1. は現在や過去の時制にかかわる質問内容であり、また、2. は近い未来の時制にかかわる質問内容である。しかし、3. は漠然とした未来への時制にかかわる質問内容であり、15歳の生徒にはイメージすることが難しい内容である。そのため、実際の利用・活用が行えるかどうかはわからないという回答が増えてしまったのではないかと推察することができる。

### 3.2 自由記述による分析

生徒の自由記述による感想を複数のサブカテゴリーに分類し、それぞれ件数を調べた。さらに、サブカテゴリーをいくつかまとめてカテゴリーとした。なお、1つの感想が複数のサブカテゴリーに該当する場合には、それぞれ件数としてカウントした。

表3 自由記述による分類

カテゴリー	件数	サブカテゴリー(例)
ICTの利用・活用	127	日常的に利用するので、活用していきたい
		インターネットを利用する際の使い方を考える
		実際に体験しながらよくわかった ルールやマナー・規則を守る・知る
ICT利用の危険性	72	インターネットを利用する際の怖さを考える
		プライバシーや、個人情報の取り扱いに注意する
		文字情報では誤解を招きやすい メールによるやり取りでは伝わらないことがある
対人関係の形成・維持	53	相手の気持ちを考える
		アサーティブになる・心がける
		アサーションの違いや、アサーションについて 自分の意思を伝える・伝えてみよう
一般道徳・倫理観	10	一人一人の行動(心)が大切
		人と人との関係を知った
		自分自身を振り返る 心について考えた
その他	3	授業を通していろいろなことを学ぶことができた

表3より、カテゴリーは“ICTの利用・活用”127件、“ICT利用の危険性”72件、“対人関係の形成・

維持”53件、“一般道徳・倫理観”10件、“その他”3件の5つとなった。

まず、“ICTの利用・活用”・“ICT利用の危険性”においては、日常生活で生徒がICTをどのように活用するか、というポジティブな考えと同時に、そこにはどんな危険性があるのかということ考えた結果であると推察できる。

また、“対人関係の形成・維持”においては、身近な情報通信機器による情報伝達を対面によるコミュニケーションと対比し、それらに共通して重要なアサーションという考え方を通して、コミュニケーションのあり方を考えた結果であると推察できる。なお、上記3つのカテゴリーについては例年と同様のカテゴリーとなった。

しかし、「一人一人の行動(心)が大切」、「人と人との関係を知った」などの“一般道徳・倫理観”のカテゴリーにおいては、今年度になって初めて現れたものである。ATプログラムでは禁止的・強制的な指示は行っていないため、生徒たちが自発的に他者に対するモラルの大切さについて考え・学んだ結果と推測される。

以上のことから、筆者らの取組みは、授業の中で実際にICTを利用する体験を通して利活用から危険性を学び、何に注意をしなければいけないのかという「情報モラル」と“一般道徳・倫理観”による意識を喚起できたといえよう。

## 4. まとめと今後の考察

ATプログラムによって、包括的な「情報モラル」を育成することができた。さらに、“一般道徳・倫理観”に対する生徒の考えを促すことができた。

今後もATプログラムの改良を行っていきたい。また、新たな“一般道徳・倫理観”と「情報モラル」の類似性・相違性について分析を行いたい。

### 引用・参考文献

- (1) 出井智子, 犬塚文雄, 福本徹(採録決定) アサーション技法を用いた「情報モラル」育成プログラムの実践研究—自由記述の分析—. 日本教育カウンセリング学会
- (2) 出井智子, 大島聡, 犬塚文雄(2011) アサーション技法を用いた「情報モラル」育成プログラムの開発. 日本教育工学会論文誌,35(1):35-45
- (3) 平木典子(2008) アサーション・トレーニング—自分も相手も大切に自己表現—. 至文堂, 東京
- (4) ロバート・E・アルベルティ, マイケル・L・エモンズ(著書)菅沼憲治, ジャレット純子(訳)(2009) 自己主張トレーニング改訂新版. 東京図書, 東京:114-126